

ウルクスユ多彩色土器についての一考察

—— インカ土器の生産体制をめぐって ——

森 下 壽 典

1. はじめに

16世紀、南米アンデス地域では、いわゆるインカ帝国が大きな勢力を有していた。それは、15世紀中葉からクスコ周辺域の地方政体が急速に拡大して成立したもので、北は現在のエクアドル、コロンビアの国境付近から、南はチリ、ボリビア、アルゼンチン北西部にまで至る広大な領域に影響を及ぼした。同領域には、現在でもその影響の証拠として、切石による精緻な石組みや台形を呈する入口・壁龕といった、インカ帝国に特徴的な要素を持つ遺構が認められる。同様に、「インカ土器Inca Pottery」と総称される土器がアンデス全域で広範に出土することも、その影響力の大きさを示している。

「インカ土器」とは、名称の通り、インカ帝国に特徴的な器形・文様をもつ土器である⁽¹⁾。その内容を大きく区分すれば、まず、時に「古典インカ土器」とも称される、クスコ周辺域でつくられた「クスコ・インカ土器」がある。器形・文様構成ともに斉一性が高く、その背景には、インカ国家による土器工人の再組織化、国家の管理による大量生産が想定されている。これに対し、帝国の拡大に伴って、各地方で国家の管理のもと生産された「地方インカ土器」が存在する。基本的に「クスコ・インカ土器」と類似した器形・文様構成をもつものが多いが、在地の土器製作技術の影響、国家による管理の度合いなど、様々な要素のため、クスコ・インカ土器と見分けのつかないものから粗雑な作りのものまで、多様性にも富んでいる。以上二種の土器の一部は、一種の威信財としてインカ国家から地方社会へ分配され、その権威を示す政治的シンボルとも捉えられてきた（たとえばMorris 1978: 323, 1991: 521; Morris and Thompson 1985: 74; 岩田2005）⁽²⁾。さらに、各地方社会がインカ土器を真似てつくった模倣土器、さらにローカルな土器スタイルと融合して生まれた、「ハイブリッド・スタイル」⁽³⁾もある。

インカ土器については、器形や文様構成、また胎土などの観点から、様々な分類が試みられてきた。しかし、その分類は一遺跡ないし一地域内部での報告にとどまっていることが多く、インカ帝国全体を対象とした研究の分析ツールとしては十分に機能してこなかった。そこで本稿では、これまで提示された分類カテゴリーのうち、ウルクスユ多彩色土器Urcusuyu Polychromeと呼ばれる一群について考察する。なお、本稿で言及する遺跡名・地名に関しては、図1を参照されたい。

2. ウルクスユ多彩色土器

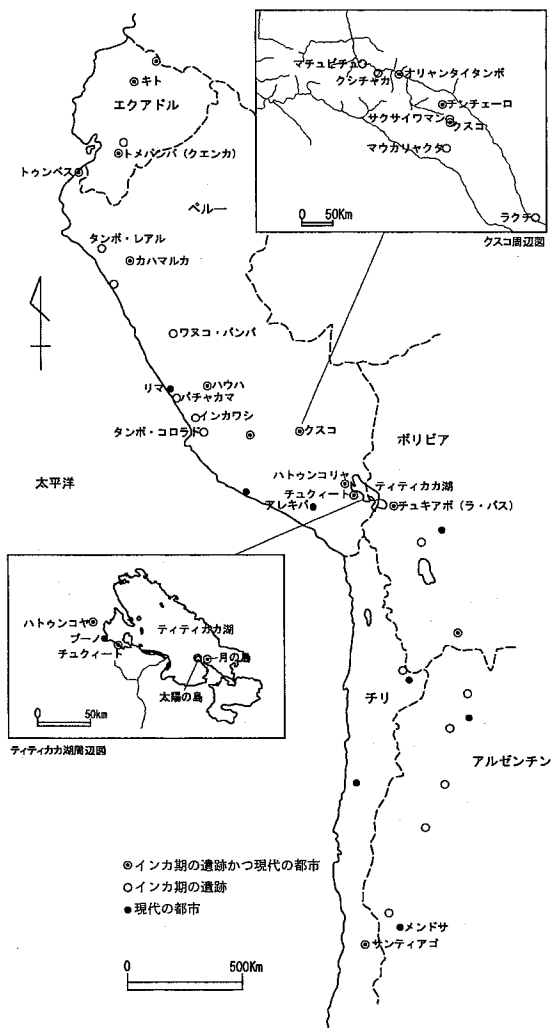


図1 アンデス全図 (John Hyslop 1984 *Inka Road System*, Academic Pressより作成。ただしクスコ周辺図はフランクリン・ピース、増田義郎 1988『図説インカ帝国』小学館、図44による)



- 1 クスコ (Qoripata) 出土 (黒・白・赤・オレンジ色)
- 2 クスコ (Qoripata) 出土 (黒・白・オレンジ色)
- 3 クスコ (Qoripata) 出土 (オレンジ色上の黒、白、赤、オレンジ色)

図2 クスコ周辺のウルクスユ多彩色土器 (Rowe 1994: Fig.19より改変・転載、S=約1/4)

現在までインカ土器研究の基盤となっている分類は、クスコ周辺の資料をもとにしてアメリカ合衆国のインカ考古学者ジョン・ロウが提示したものである (Rowe 1944: 43-50)⁽⁴⁾。ロウは、すべての分類について、同一の項目で基準を示しているわけではないが、記述内容をまとめると表1のようになる。このうち、クスコ多彩色、クスコ淡黄色、クスコ赤白、クスコ多彩色図像文の各分類は、同一の胎土を持ち、文様構成(有無を含む)によってのみ分類されたグループである。さらに、クスコ多彩色土器の文様構成には、AとBの2パターンが存在する(表2)。これらの土器は、すべてクスコ・インカ土器と考えてよい。一方、コリパタ多彩色土器とワタナイ多彩色土器は、クスコ多彩色と類似した胎土を持つが、文様要素・構成が明らかに異なるものである。両者とも、クスコ周辺の遺跡で一般的に見つかる。

ウルクスユ多彩色土器も、この分類においてはじめて明確に記述された(図2)。最大の特徴は、他のクスコ多彩色土器が最大3色で彩色されたものであるのに対し、オレンジ色を加えた最大4色の彩

分類名称	胎土 質・色	表面 調整	色調	混和物	スリッ	彩色	文様
クスコ多彩色 (Cuzco Polychrome)	中庸、堅い	通常レンガ色 (brick red)、焼 成により中堅ま で、あるいは完全 に黒色ないし灰 色を呈す	堅く、丁寧な磨き レンガ色から明る いオレンジ色	細かい黒色・白色 の砂・小石(eggs), いくらかの雲母。	暗い赤色ないし白色の スリッを持つものがあ る。黒色スリッのものも 少数ある。スリッが土 器全体を覆っていること は稀。	黒、白、赤	AとBの2つの文様構成に 分類可能 ※表2参照
クスコ淡黄色 (Cuzco Buff)	"	"	"	"	—	なし	なし
クスコ赤白 (Cuzco Red and White)	"	"	"	"	赤色ないし白色のスリ ッ	なし、または白、赤	全体がスリッの赤色・白 色であるが、赤・白半々 になるよう彩色。
クスコ多彩色図像文 (Cuzco Polychrome Figured)	"	"	"	"	暗い赤色ないし白色の スリッを持つものがあ る。黒色スリッのものも 少数ある。スリッが土 器全体を覆っていること は稀。	黒、白、赤	様式化された人物、植 物、動物などの図像と幾 何学文、あるいは様式化 された図像文のみ
コリパタ多彩色 (Qoripata Polychrome)	"	"	"	"	暗い赤色	黒・白	黒で縁取りされた複数の 円・方形・雷文の帯。黒・ 白の線や白い点がそこに 施されることもある。暗く、 豪華な感じ。
ワタナイ多彩色 (Huatanay Polychrome)	"	"	"	"	—	黒、白、赤	白い帯上に黒と赤の線で 描かれたハッチング(網掛 け・斜線掛け)された変形 の列。文様の描き方は粗 鈍。
ウルクスユ多彩色 (Urosuyu Polychrome)	中庸	黄色(赤色から暗 い茶色にかけて) 密で丁寧な磨き。 内表面は白いが 滑らかでない。	—	細かい小石・砂、 少量の雲母。白い 小石・砂は認めら れない。	なし(全体が文様で埋め られている)	黒、クリーム色の 白、赤、オレンジ	幾何学文、雷文、三角 形、雷文を含む。黒色の 線はデザインを縁取るこ とがある。曲線は稀。

* 例外的な事例であるCanchón Types、および各分類と主な器形との関連を除く

表1 インカ土器の分類 (Rowe 1944より作成)

色がなされる点であり、胎土はクスコ多彩色土器と類似しているが、同一とは言えないという。また、起源地は不明だというものの、クスコ周辺だけでなく、チュキート、ハトゥンコリヤなどのティティカカ湖周辺で見つかることされた。

その後の調査・研究により、ウルクスユ多彩色土器はティティカカ湖周辺で典型的な土器であると捉えられるようになった(たとえばLumbreras and Amat 1968;

Rivera 1976: 77; 岩田 2005: 271)。ティティカカ湖周辺の土器スタイルについて分類・定義を行ったマリオン・チョピックは、インカ土器と関連のある多彩色土器として、チュキート多彩色土器、タラコ多彩色土器、ウルクスユ多彩色土器について記述している。彼女によれば、ウルクスユ多彩色土器の胎土の肌理は中庸であり、黄色から赤、暗い茶色まで様々な色調を呈する。混和物としては少量の雲母とともに小鉱物を含み、外面はコンパクトで入念に磨かれている一方、内面は調整が不十分で削ったような跡が観察される。スリッはなく、表面全体が幾何学文様で覆われている(図3)。一方、タラコ多彩色土器は、白色ないしクリーム色のカオリンを用い、

	A	B
頸部	Banded Neck 細い白線で分けられた、水平の黒、あるいは赤の帯	Diamond Neck 小さく黒い菱形の列、核列は赤地に黒いラインで縁取りされている
	Cross-hatched Neck 赤色の斜交平行文様に黒い帯、縞模様を伴う	
	Red 赤一色	A designs Aと同様、白い縞で区切られた赤・あるいは黒の帯
背面肩部	Waved Shoulder 3, 4の水平な黒色ラインの2つの列で、列は、広い間隔で4つかそれ以上の垂直の波形線のグループを除き(Waved Shoulder)、装飾のない広い帯によって区分されている	Waved Shoulder 3, 4の水平な黒色ラインの2つの列で、列は、広い間隔で4つかそれ以上の垂直の波形線のグループを除き(Waved Shoulder)、装飾のない広い帯によって区分されている
	Cross Shoulder 何本かの線で構成されたXのパターン	Cross Shoulder 何本かの線で構成されたXのパターン
	Lattice A 垂直の縞	Concentric Diamonds 明るい、暗い、あるいはクロスハッチやチェックの地に幅広いの帯の中に同心の線で構成された大きな菱形の垂直の列
前面中央	Staggered Line 互い違いの方向の対角線のグループによって構成された垂直のジグザグ文様	Lattice B サイドに沿った2本の線のXで構成された縞と幅広いの帯の中に同心の線で構成された大きな菱形の垂直の列
	Fern Pattern 羊歯文	Stripe and Triangle 黒色の線で区分された、赤い三角形の上の小さな黒色で構成された水平の列で、常に三角形は頂点を下にに向けている

表2 クスコ多彩色A土器とB土器の文様構成 (Rowe 1944より作成)

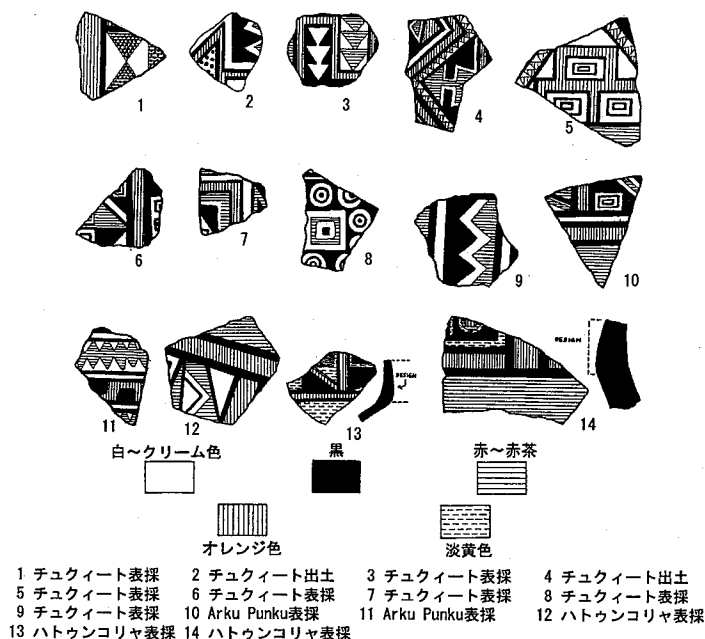


図3 ティティカカ湖周辺のウルクスユ多彩色土器 (Tschopik 1946: Fig.19より改変・転載、S=約1/4)

内面に、斑点文 (cat spot) などの文様で囲まれた2本のオレンジ色の帯状文がめぐるものであり (Tschopik 1946: 31-32)、チュクイート多彩色土器は、赤系統の色の胎土で、リャマや鳥、虫、トウガラシや人物などの具象文が特徴である (Tschopik 1946: 51-52; Tschopik 1950: 197-198)。両者とも、器形としては浅鉢がほとんどを占めるという⁽⁵⁾。

ティティカカ湖周辺の、以上3つの多彩色土器は、相互に影響関係が認められ⁽⁶⁾、基盤資料の僅少さ

もあって、事例によっては明確に区分することが難しい場合もある。しかし、本稿では、非カオリン胎土で、オレンジ色の彩色をもち、幾何学文が卓越するものをウルクスユ多彩色土器と捉えておきたい。

こうしたウルクスユ多彩色土器の幾何学文は、クスコ多彩色B土器の影響を強く受けているという (Julien 1993: 194)。ティティカカ湖北部にあるハトゥンコリヤ遺跡の調査では、層位的な発掘の結果、クスコ多彩色A土器の文様構成を持つ土器より同B土器の出現が遅れる現象が捉えられ、クスコにおける文様構成の変化が反映していると解釈された (Julien 1978: 208, 1983: 147-148, 252-253)。したがって、ウルクスユ多彩色土器がクスコ多彩色B土器の影響を受けて成立したとすれば、クスコ多彩色A→B→ウルクスユ多彩色という順で出現したと考えられる。無論、完全な土器スタイルの置換が起こったわけではなく、各文様構成は併存したと考えられるものの、ウルクスユ多彩色土器の出土が、インカ期でも比較的新しい時期の指標となる可能性がある⁽⁷⁾。

3. ウルクスユ多彩色土器の出土例

以上のように、これまでの諸研究では、ウルクスユ多彩色土器はクスコ・インカ土器、とくに多彩色B土器の影響を受けてティティカカ湖周辺で成立した土器スタイルであると考えられてき

た。たしかに、チョピックらが分類の際に使用した事例の他、20世紀初頭にティティカカ湖の「太陽の島」などで見つかったインカ土器（たとえばBandelier 1910: Plate LXVII, LXXVI）の多くは、ウルクスユ多彩色土器に分類可能である。

しかし、クスコ周辺域では、ロウが指摘している以上に多くの事例が認められる。たとえば、スペイン隊による発掘調査が行われたクスコ北西のチンチェーロでは、複数のウルクスユ多彩色土器片が報告されている（Rivera 1976: 59-61, Fig.95, 96; 図4）。また、オリヤンタイタンボ遺跡でBaño de Ñustaと呼ばれる水場遺構（いわゆるバーニョ・デル・インカ⁽⁸⁾）の発掘においては、儀礼的に奉獻された土器が見つかった。このうち皿4点⁽⁹⁾は類似した文様構成を持ち、オレンジ色を含む4色で彩色が施されていることから、ウルクスユ多彩色土器の範疇で捉えられる（Gibaja 2004: 178-179, Fig.5-10; 図5）。さらに西方のマチュピチュ遺跡においても、やはりウルクスユ多彩色土器の文様構成をもつ、インカ土器に典型的な器形である壺形土器（アリバロ）が見つかった（Burger and Salazar 2004: 131, No.13; 図6）。

一方、アメリカ合衆国の考古学者ブライアン・バウアーによって実施されたクスコ南方約30kmにあるマウカリヤクタ遺跡の発掘調査では、広場に近接した部屋構造の内部で、インカ期の墓が1基見つかった。この墓は盗掘を受けていたものの、人骨や、金属製品、土器など副葬品の多くが残存しており、その中でウルクスユ多彩色土器のアリバロと、調査者自身は明言していないものの、オレンジ色の彩色が施され、やはりウルクスユ多彩色土器に分類可能だと考えられる皿が出土している（Bauer 2004: 213-216, Fig.43, Fig.44, 図7）。

出土事例はクスコ周辺にとどまらない。ペルー海岸部のパチャカマ遺跡では、インカ期の主要建築物である「太陽の神殿」で見つかった、複数の女性の生け贄の墓より、皿1点と、写真が白黒のため断定はできないが、やはりウルクスユ多彩色土器の範疇として捉えてよいと考えられる把手付きの浅鉢が見つかった（Uhle 1998 [1903]: 158, lám. 18）。ペルー中央高地の大規模な行政センターであるワヌコ・パンパ遺跡および近郊でも、図示が十分でないため確実ではないが、ウルクスユ多彩色土器と思われる土器片が見つかった（Morris and Thompson 1985: Fig.9, 69）。また、調査者は胎土の観察と類例からクスコからの搬入品であることを示唆しているのみだが、ペルー北高地のタントリカ遺跡に出土例がある（Watanabe 2002: 128, Fig. 21）。加えて、第二のクスコとも呼ばれ、インカ帝国北方領域の中心地であったトメバンバ（現クエンカ）でも、遺構が残存するプマプンゴ地区の調査で、小片のため器形は不明なものの、ウルクスユ多彩色土器の破片が数点出土しているほか、完形の皿も見つかった（Idrovo 2000: 305, 299）。

このように、ウルクスユ多彩色土器は、必ずしもティティカカ湖周辺でのみ見つかるのではなく、クスコ周辺のかなり広い範囲で一定量が出土し、確認できる事例は少数ながら、その他の地域でもインカ帝国の影響圏全域で出土している。このような分布の背景にはどのような生産体制

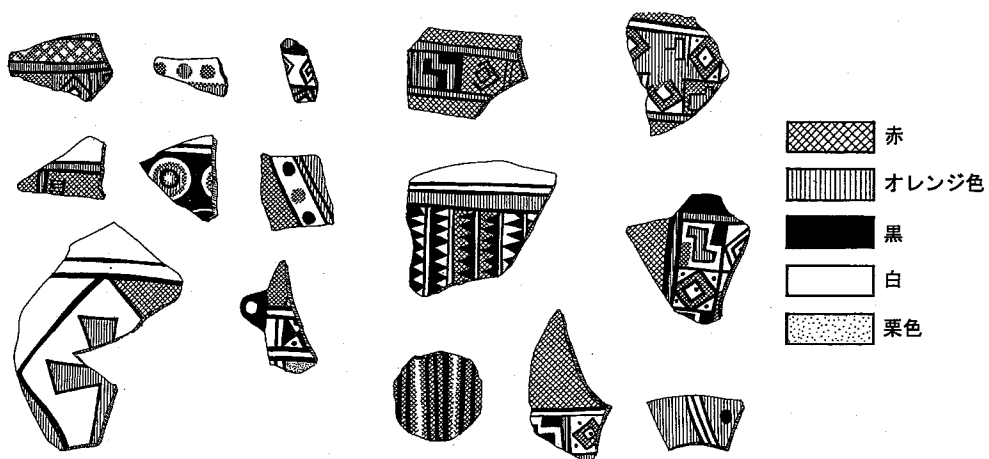


図4 チンチェーロ出土のウルクスユ多彩色土器 (Rivera 1976: Fig.95, 96より改変・転載、S=約1/4)

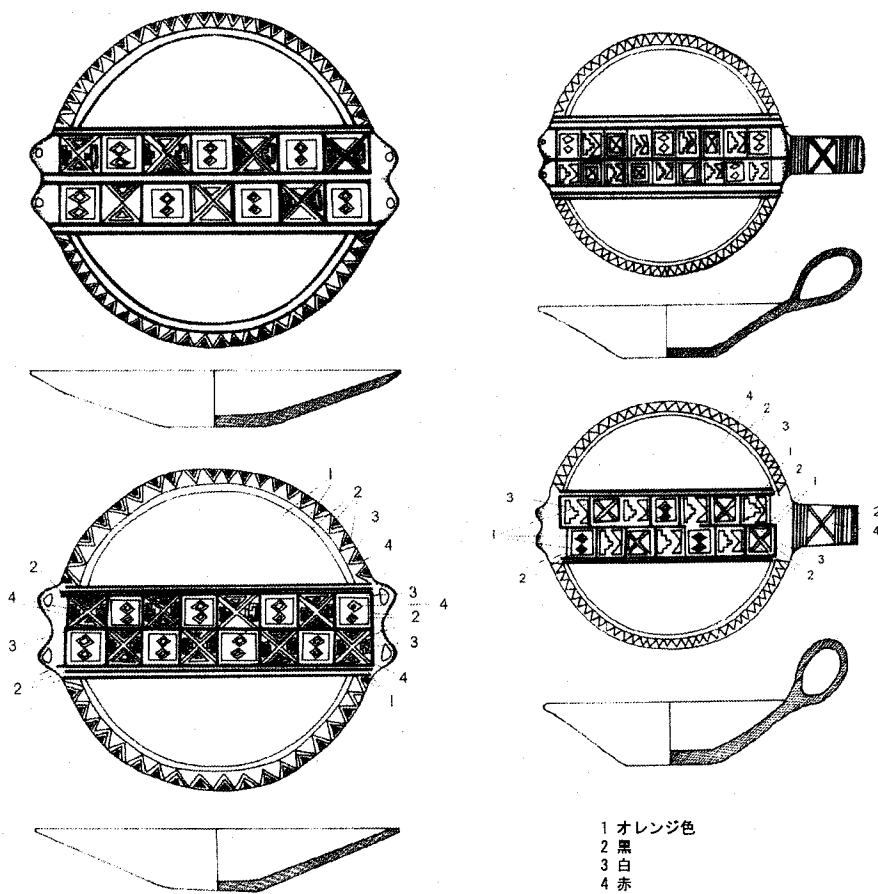


図5 オリヤンタイタンボ出土のウルクスユ多彩色土器 (Gibaja 2004: Fig.7-10より改変・転載、S=約1/5)

があったのだろうか。まずつぎに、一般的なインカ土器生産のあり方について検討しておきたい。

4. インカ土器の生産体制

文書研究により、インカ帝国には、互惠制に基づきつつも強制力を伴った、ミタと呼ばれる労働力動員システムがあったことが知られている。これは、インカ側が食料などを供給する代わりに、その反対贈与として地方社会が労働力を提供するものである。また、拠点の建設や農地開発などのため、地方社会の人々を植民集団（ミティマエス）として、各地へ派遣・移住させていた⁽¹⁰⁾。このミティマエスの一種として、サーニョ・カマーヨ Sañoc Camayoc と呼ばれる土器工人⁽¹¹⁾が存在したと考えられている⁽¹²⁾。

フランシス・ハヤシダ（Hayashida 1998）は、文書資料を詳細に検討し、各地域でインカ国家による土器生産体制再編が行われ、地方ごとの土器生産が行われたことを明らかにした。この研究によれば、各地域によってかなりの多様性があるものの、粘土採取地や行政センター近郊に土器工人のために新たな居住地が設定され、ときには工人のために農地が割り当てられた（土器工人みずから耕作したかは不明）。場合によっては通常の植民とは異なり、故地の共同体との繋がりを断たれ、土器製作が世襲化され⁽¹³⁾、国家による強力な再編が実行された。一方、生産を監督するのが土器製作の技術を持った人物とは限らず（織物職人が監督者である場合もあった）、また監督も常時ではなく周期的であった事例があり、土器生産そのものの管理は、必ずしも厳格ではなかったと考えられている。

地方ごとにインカ土器の生産が行われたという状況は、考古学的にも観察されている。たとえば、アンデス中央高地では、ローカルな土器を圧倒するようにインカ土器が用いられるようになるが（Morris and Thompson 1985: 73-74; D'Altroy 1992: 116）、それは形⁽¹⁴⁾、スタイル、胎土の特徴から、クスコ周辺域のインカ土器とは明確に区別され、地域レベルで生産・分配された、いわゆる地方インカ土器である（Morris and Thompson 1985: 76）。同様の状況は、南部高地でも確認されている（Julien 1983: 252）。さらに、クスコ周辺域、ティティカカ湖の「太陽の島」など、アンデス各地から採集された173の土器片の胎土を理化学的分析した結果、クスコ周辺域から他地域に運ばれたと考えられるのは2点のみであった（D'Altroy and Bishop 1990）。

また、ペルー北海岸のレチェ谷では、インカ道沿いに

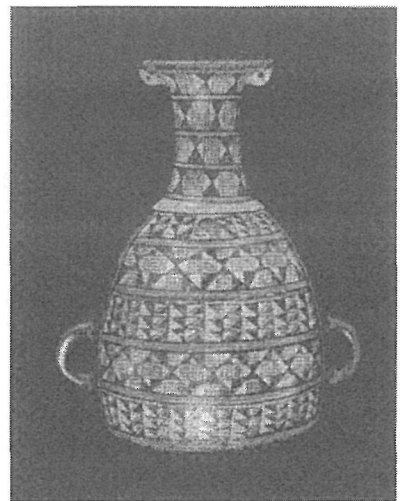


図6 マチュピチュ出土のウルクスユ多彩色土器（Burger and Salazar 2004: Fig.13を転載）

タンボ・レアルとラ・ビーニャという2つの行政センターがあり、それぞれに付属していくつかのインカ土器製作地が確認・調査された。この調査では、表採した土器片が分析され、同じ製作場所でローカルな土器も地方インカ土器も、また両者のハイブリッド・スタイルの土器もつくられていたこと、タンボ・レアルとラ・ビーニャで分業が行われていたのではなく、双方で同じ器種が生産されていたこと、ラ・ビーニャ生産の土器はラ・ビーニャで、タンボ・レアル生産の土器は同遺跡および近傍のセロ・セメンテーリオスで消費されていたことが明らかにされた (Hayashida 1995: 228, 230)。つまり、レチェ谷でのインカ土器の流通圏は極めて限られていた

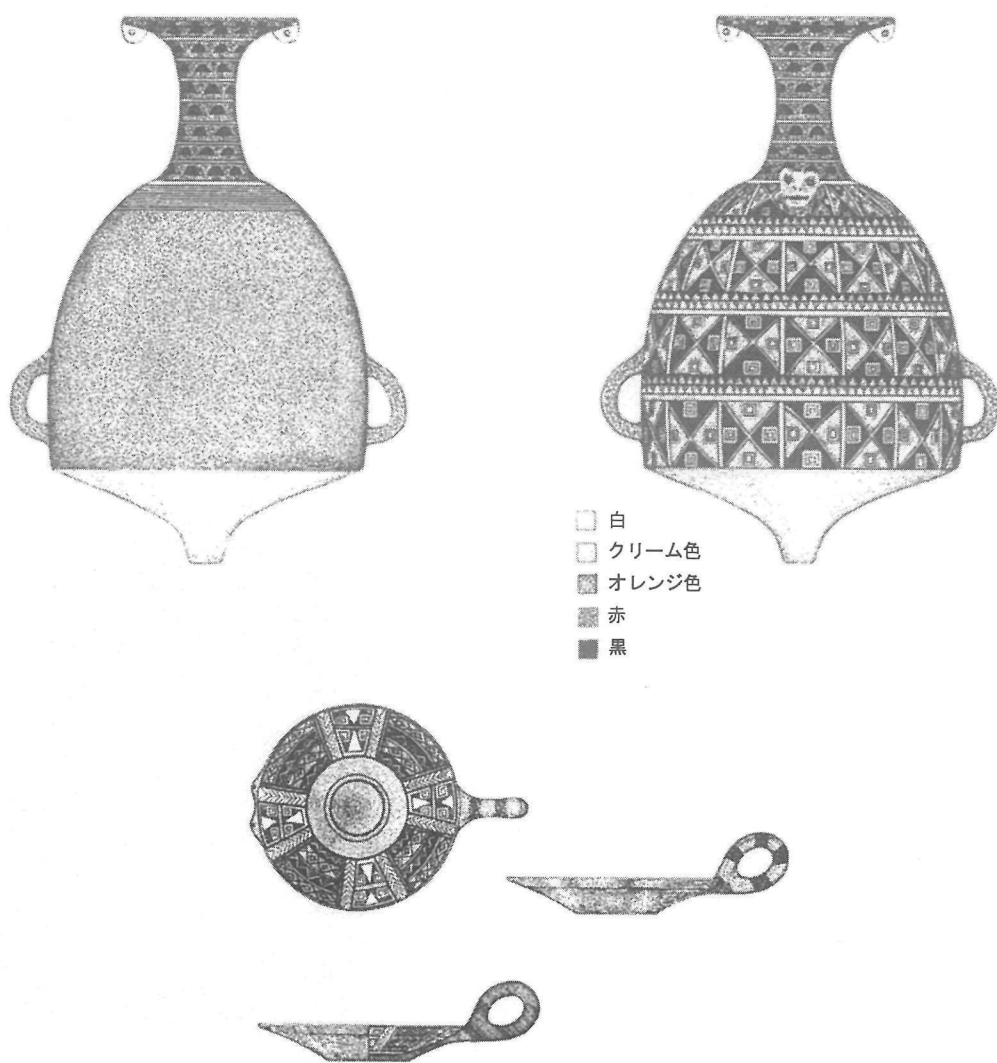


図7 マウカリャクタ出土のウルクスユ多彩色土器 (Bauer 2004: Fig.43, 44より改変・転載、S=約1/5)

のである。

インカ土器の製作技術の点からも、地方ごとに生産が行われたことが示唆される。ラント (Lunt 1984: 311, 1988: 493) によれば、クスコ周辺域 (およびその近郊のクシチャカ周辺域) の古典インカ土器は、安山岩の小破片を混和物として加えた生地を用い、粘土紐を螺旋状に積んでいく巻き上げ技法により成形されている。さらに、アリバロなど大型の土器は各部分を分割して成形し、乾燥後、粘土を貼り付けることで接合し、製作されているという。この成形技法については、サクサイワマンの墓出土の土器でも確認されている (Julien 2004: 7)。焼成については焼成遺構が検出されていないため、詳細は不明であるが、現在のアンデス地域でも一般的な野焼き⁽¹⁵⁾で、酸化焼成されたと考えられる。一方、先述のレチェ谷の調査では、ペルー北海岸でインカ国家の影響が及ぶ前より一般的な「型作り」が、インカ土器製作においてもそのまま使用されていることが明らかにされている (Hayashida 1995: 211, 230)⁽¹⁶⁾。胎土にも意図的に混ぜられた混和物がなく、また、焼成に関しては、意図的な還元焼成ののち、短期間酸化状態におくことで望む色調 (赤色調reddish) を得ようとしたと考えられる資料があり (Hayashida 1995: 212, 215)⁽¹⁷⁾、明らかにラントが報告する古典インカ土器の製作技術と異なっている。型作りほど明瞭な指標があるわけではないものの、在地の土器製作技術がインカ土器の製作においてもそのまま用いられている事例は、ワヌコ・パンパでも指摘されている (Morris and Thompson 1985: 74)。

このように、インカ土器はクスコ周辺域で一括して生産され、各地に運ばれたのではなく、インカ帝国のコントロールのもと各地で生産され、その流通圏が限られていたということが、文書資料からも考古資料からも強く示唆される。

しかし、クスコ多彩色AやBの文様構成を持つインカ土器は、アンデス全体に広がっている。その背景には、はじめに述べたように、クスコ・インカ土器が一種の威信財としてインカ国家から地方社会へ分配されたためであり、またクスコ以外の各地方でも文様構成が



図8 パチャカマ出土のウルクスユ多彩色土器 (Uhle 1998[1903]: lám 18より転載)

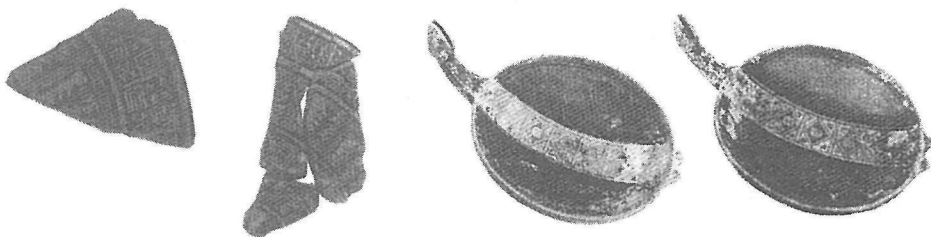


図9 トメバンパ出土のウルクスユ多彩色土器 (Idrovo 2000: 299, 305より改変・転載)

模倣され、生産されたためだと考えられる。ジョン・ヒスロップ (Hyslop 1993: 341) は、「インカ土器は主にそれが使われた場所で作られた」と述べる一方で、各地方ごとの土器生産体制とは別に、インカ国家に直属する土器工人state potterを想定し、とくに精巧なインカ土器が見つかるエクアドルのキト市周辺、クエンカ市(トメバンバ)周辺、ペルー南海岸、ティティカカ湖周辺領域では、クスコで訓練されたか、クスコで訓練を受けた熟練工人に教わったstate potterが土器を大量生産したと考えた。しかし、戦いに際しては、夫に食事を準備するために、女性たちが土器(鍋)を運びながら従ったという文書記録(Pizarro 1965[1571]: 238)も知られており、なおクスコなど遠方からの搬入の可能性も捨てるべきではないだろう。先に触れた胎土分析による研究でも、一部の土器、たとえば皿のように軽く、つくりの良い土器が長距離運ばれた可能性までは否定していない(D'Altroy and Bishop 1990: 133)。

5. 考察

このような一般的なインカ土器の生産体制を考慮すると、ウルクスユ多彩色土器の広範な分布の背景として考えられるのは、①ティティカカ湖周辺でつくられたウルクスユ多彩色土器の各地への搬入、②ウルクスユ多彩色土器の生産を目的としたティティカカ湖周辺の土器工人の強制移住、③他の目的のために移住させられたティティカカ湖周辺出身土器工人による限定的製作⁽¹⁸⁾、④インカ国家によって再編された各地の土器工人による国家的生産、⑤各地方社会での模倣、といったところであろう。

ウルクスユ多彩色土器は、マウカリャクタやオリヤンタイタンボにおいて副葬品や国家的施設における奉獻用土器として見つかったように、粗雑なつくりの日用土器ではなく、精巧な多彩色土器である。したがって、③のようにティティカカ湖周辺の人々が移住した結果というだけでは、説得力に欠ける。また⑤のように模倣の可能性も低い。これまでは一般的に、③あるいは①のように解釈されてきたが(たとえば岩田2005: 272)、表面的な文様構成だけでなく、製作技術の観察や胎土分析によって②や④の可能性についても検討する必要があるだろう。いずれにせよ、ウルクスユ多彩色土器の広範な分布は、一般的な地方インカ土器生産のあり方では解釈し得ず、ティティカカ湖周辺域の一地方スタイルとしてのみ捉えることはできない。

ウルクスユ多彩色土器と同様に、ティティカカ湖周辺の他のインカ土器もまた、広範な分布域をもつ。たとえば、カオリン胎土を持つ広義のタラコ多彩色土器は(註5参照)、製作地から250km北方のラクチャやペルー南海岸でも見つまっている(Spurling 1992: 375-379)。また、ナマズの具象文や斑点文からチュクウィート多彩色土器と関連すると考えられる土器は、チンチェーロの調査でワマン多彩色土器として報告されている(Rivera 1976: 60, 62, 63, Fig.97, 98)ほか、オリヤンタイタンボ遺跡においても一定量出土している(Gibaja 1984: Fig.4)⁽¹⁹⁾。マチュピチュ遺跡からも、主に墓から、多くのティティカカ湖系の土器が出土している(たとえばBurger

and Salazar 2004: 130-131, 133, 142-143, No.12, 21, 49, 50)。ウルクスユ多彩色土器も、このようなティティカカ湖系の土器の広範な分布と関連して捉える必要がある。

さらに、ジャガーやヘビが把手に形象されたり、具象文が精緻に描かれるなど、インカ土器の中で例外的に精巧に作られた多彩色土器の多くが、ティティカカ湖系土器の特徴をもつ（たとえば増田1991: 136-137の図20, 22; Morris 1994: 117; Burger and Salazar 2004: 139, 153, No.40, No.78)。また、トラコ多彩色・チュクゥート多彩色土器の器形が可搬性に優れ、つまり威信財として流通が容易な皿や浅鉢にほぼ限定され、ほとんどのウルクスユ多彩色土器も、皿や鉢の他、もっともインカ帝国に特徴的な壺形土器が主体を占めることにも留意する必要がある。つまり、ウルクスユ多彩色土器の広範な分布の背景に、クスコ・インカ土器のような威信財的重要性を考えたいのである。

ティティカカ湖は、アンデス地域において創造神存在であったピラコチャが出現した場所とされており、インカ王族の出自の場とするインカ国家の起源神話もある⁽²⁰⁾。また、同領域には、長期間にわたり巡礼地として機能していたティワナク社会がかつて繁栄しており、その土器文様をインカが模倣したと考えられる土器さえ存在している (Varcárcel 1935: Fig.72; Buck 1935: Fig.1)⁽²¹⁾。さらに、インカ帝国に特有の高度な石工技術は、ティティカカ湖周辺地域の技術を元に行っているとも言われる (Gasparini and Margolies 1980: 3-33; Hyslop 1990: 21-27)⁽²²⁾。このようなティティカカ湖周辺地域の政治的・宗教的重要性を考慮すれば、クスコ・インカ土器が一方向的にティティカカ湖周辺の土器スタイルに影響を与え、新しい地方土器スタイルが生まれたというより、むしろインカ側が、積極的に同領域の土器スタイルを採用した可能性も想定できる⁽²³⁾。

6. おわりに

本稿では、インカ土器の分類に関する研究の中で設定されたウルクスユ多彩色土器に注目し、一般的なインカ土器の流通圏が限られていたにも関わらず、それがティティカカ湖周辺の地方土器に止まらない分布域を持っていることを指摘した。その背景としては、ティティカカ湖周辺地域の政治的・宗教的重要性が想定されると述べた。

インカ遺跡に関する発掘調査は、近年、めざましい成果を上げている。一方、報告書が刊行されることは決して多くなく、刊行された場合も出土土器の実測図など基礎的な資料が整備されていることは稀である。そのためもあり、本稿は極めて限定的な資料に拠らざるを得なかった。しかし、ごく少数の資料によってさえ、ウルクスユ多彩色土器の広範な分布が認められたことは、逆にその意義を強調しているとも言えよう。本稿では、ウルクスユ多彩色土器という、考古学的なカテゴリーに主眼をおいており、また紙幅の関係もあって文書資料については詳細に扱わなかった。今後、考古資料の増加を待つとともに、これらを含めて再検討したい。

なお、本稿は文部科学省科学研究費補助金（若手B、課題番号18720215）、早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号2005A-832, 2006K-040）による成果の一部であり、また早稲田大学考古学会第11回研究発表会（2005年12月）において「インカ土器研究の現状と課題」と題して発表した内容の一部をもとにしている。

謝辞

指導教員である寺崎秀一郎先生には、本稿をご校閲頂き、貴重なご意見を賜った。東海大学の太平秀一先生には、南米での調査へ継続的に参加させて頂いているのをはじめ、日頃より大変お世話になっている。末筆ながら、記して深謝申し上げます。

引用文献

- 網野徹哉 1988「アンデスの隷属民—インカ社会のヤナコーナに関する一考察（上・下）」『月刊百科』4月号・7月号（平凡社）、31-39頁および31-39頁。
- 岩田安之 1998「インカ土器の文様変容について」貞末堯司先生古希記念論集編集委員会（編）『貞末堯司先生古希記念論集 文明の考古学』（海鳴社）、19-29頁。
- 岩田安之 2005「インカ期の中央と地方」貞末堯司（編）『マヤとインカ 王権の成立と展開』（同成社）、265-278頁。
- 太平秀一 1993「エクアドル南部高地のSañoc Camayoc —アソーゲス周辺域におけるインカの土器職人の存在をめぐって—」『早稲田大学文学研究科紀要』別冊第20集哲学・史学編（早稲田大学大学院文学研究科）、117-132頁。
- 増田義郎 1991「征服と美術 —インカおよびインカに征服された諸文化—」増田義郎・島田泉（編）『古代アンデス美術』（岩波書店）、第VI章、125-148頁。
- Bandelier, Adolph F. 1910 *The islands of Titicaca and Koati*. The Hispanica society of America, New York.
- Bauer, Brian S. 2004 Recent archaeological investigations at the sites of Maukallaqta and Puma Orco, Department of Cuzco, Peru. *Ñawpa Pacha*, 25-27, Institute of Andean Studies, Berkeley, 2004 (1987-1989). pp.207-250.
- Buck, Fritz 1935 Cuzco-Tiahuanacu. *Revista del Museo Nacional*. Tomo IV, No.2. Lima. págs. 111-114.
- Burger, Richard L. and Lucy C. Salazar (eds.) 2004 *Machu Picchu: Unveiling the Mystery of the Incas*. Yale University Press, New Haven and London.
- Cobo, Bernabé 1956[1653] *Historia del nuevo mundo*. Biblioteca de Autores Españoles vols. 91-92, Madrid.
- D'Altroy, Terence N. 1992 *Provincial Power in the Inka Empire*. Smithsonian Institution Press, Washington, D.C.
- D'Altroy, Terence N. and Ronald L. Bishop 1990 The Provincial Organization of Inka Ceramic Production. *American Antiquity*, Vol.55, No.1. pp.120-138.
- Gasparini, Graziano and Luis Margolies (trans. by Patricia J. Lyon) 1980 *Inca Architecture*. Indiana University Press, Bloomington and London.
- Gibaja de Valencia, Arminda 1984 Secuencia cultural de Ollantaytambo. Ann Kendall (ed.), *Current Archaeological Projects in the Central Andes: Some approaches and results. Proceedings of 44th International Congress of Americanistas, Manchester 1982*. BAR International Series 210. pp.225-246.
- Gibaja Oviedo, Arminda 2004 Dos Ofrendas al Agua del Ollantaytambo. *Ñawpa Pacha*, 25-27, Institute of Andean Studies, Berkeley, 2004 (1987-1989). pp.177-188.

- Hayashida, Frances M. 1995 *State Pottery Production in the Inka Provinces*. Ph. D. dissertation. University of Michigan.
- Hayashida, Frances M. 1998 New Insights into Inka Pottery Production. Izumi Shimad (ed.), *Andean Ceramics: Technology, Organization, and Approaches*. Museum Applied Science Center for Archaeology, University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, Philadelphia. pp.313-335.
- Hyslop, John 1990 *Inka Settlement Planning*. University of Texas Press, Austin.
- Hyslop, John 1993 Factors Influencing the Transmission and Distribution of Inka Cultural Materials Throughout Tawantinsuyu. Don Stephen Rice (ed.), *Latin American Horizons, A Symposium at Dumbarton Oaks 11th and 12th 1986*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D. C. pp.337-356.
- Idrovo Urigüen, Jaime 2000 *Tomebamba: Arqueología e Historia de una Ciudad Imperial*. Banco Central del Ecuador, Cuenca.
- Julien, Catherine J. 1978 *Inca Administration in the Titicaca Basin as Reflected at the Provincial Capital of Hatunqolla*. Ph. D. dissertation, Department of Anthropology, University of California, Berkeley.
- Julien, Catherine J. 1981 A Late Burial from Cerro Azoguini, Puno. *Ñawpa Pacha*, 19. Institute of Andean Studies, Berkeley. pp.129-154.
- Julien, Catherine J. 1983 *Hatunqolla: A View of Inca Rule from the Lake Titicaca Region*. University of California Press, Berkeley.
- Julien, Catherine J. 1993 Finding a Fit: Archeological Ethnohistory of the Incas. Michael A. Malpass (ed.), *Provincial Inca*. University of Iowa Press. pp.177-233.
- Julien, Catherine J. 2004 Las tumbas de Sacsahuaman y el estilo Cuzco-Inca. *Ñawpa Pacha*, 25-27, Institute of Andean Studies, Berkeley. 2004 (1987-1989). pags. 1-125.
- Lumbreras, Luis G. y Hernan Amat 1968 Secuencia arqueológica del Altiplano Occidental del Titicaca. *Actas y Memorias del XXXVII Congreso Internacional de Americanistas*, Vol.2. Buenos Aires. pags. 75-106.
- Lunt, Sarah W. 1984 An Introduction to the Pottery from the Excavations at Cusichaca, Department of Cuzco, Peru. Ann Kendall (ed.), *Current Archaeological Projects in the Central Andes*. BAR International Series 210. pp.307-322.
- Lunt, Sarah W. 1988 The Manufacture of the Inca Aryballus. Nicholas J. Saunders and Olivier de Montmollin (eds.), *Recent Studies in Pre-Columbian Archaeology*, part ii. BAR International Series 421 (ii). pp.489-511.
- Means, Philip A. 1935 Notas polémicas: Cuzco-Tiahuanacu, su verdadera relación cronológica. *Revista del Museo Nacional*, Tomo 4, No.2, II semestre. Lima. pp.206-208.
- Menzel, Dorothy 1976 *Pottery Style and Society in Ancient Peru*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles.
- Morris, Craig 1978 The Archaeological Study of Andean Exchange Systems. Redman, C. L. et al. (eds.), *Social Archaeology: Beyond Subsistence and Dating*. Academic Press, New York. pp.315-328.
- Morris, Craig 1991 Signs of Division, Symbols of Unity: Art in the Inka Empire. J. A. Levenson (ed.), *Circa 1492: Art in the Age of Exploration*. National Gallery of Art, Washington, D.C. pp.521-528.
- Morris, Craig 1994 The Inka State: An Andean Empire of Great Diversity. Goran Burenhult, et al. (eds.), *New World and Pacific Civilizations: Cultures of America, Asia, and the Pacific*. American

- Museum of Natural History, The Illustrated History of Humankind, Vol.4. HarperSanFrancisco.
- Morris, Craig and Donald E. Thompson 1985 *Huánuco Pampa: An Inca City and its Hinterland*. Thames and Hudson, Inc., New York.
- Murra, John V. 1980 *The Economic Organization of the Inka State*. JAI Press. Connecticut.
- Pizarro, Pedro 1965[1571] Relación del descubrimiento y conquista de los reinos del Perú. *Biblioteca de Autores Españoles* 168, Madrid. pp.159-242.
- Rivera, Miguel 1976 La cerámica Inca de Chinchero. José Alcina Franch et al., *Arqueología de Chinchero, 2: Cerámica y otros materiales*. Madrid. págs. 27-90.
- Rowe, John H. 1944 *An Introduction to the Archaeology of Cuzco*. Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology: Vol.XXVII-No.2. Peabody Museum, Cambridge.
- Rowe, John H. 1947 Inca Culture at the Time of the Spanish Conquest. Julian H. Steward (ed.), *Handbook of South American Indians, Vol.2, The Andean Civilization*. United States Government Printing Office, Washington, D.C. pp.183-330.
- Spurling, Geoffrey E. 1992 *The organization of craft production in the Inka state: The potters and weavers of Milliraya*. Ph. D. dissertation. Cornell University.
- Tschopik, Jr., Harry. 1950 An Andean Ceramic Tradition in Historical Perspective. *American Antiquity*, No.3. pp.196-218.
- Tschopik, Marion H. 1946 *Some notes on the archaeology of the Department of Puno, Peru*. Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Vol.XXVII, No.3. Cambridge.
- Uhle, Max 1998[1903] Pachacamac. Report of the William Pepper, M. D., LL. D., Peruvian Expedition of 1896. lám. 18. Peter Kaulicke (ed.), *Max Uhle y Peru Antiguo*. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima. pág. 158.
- Valcárcel, Luis E. 1935 Sajsawaman redescubierto (IV). *Revista del Museo Nacional*. Tomo IV, No.2. Lima. págs. 161-203.
- Watanabe, Shinya 2002 El reino de Cuzismancu: Orígenes y transformación en el Tawantinsuyu. *Boletín de Arqueología PUCP*, No. 6: *Identidad y transformación en el Tawantinsuyu y en los Andes coloniales. Perspectivas arqueológicas y etnohistóricas*. primera parte. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

註

- (1) 「インカ土器」という用語は、ロウ (Rowe 1944) によってそのスタイルが記述された土器に限定して用いられる場合もあるが (たとえば Lunt 1984: 308)、本稿では、本文中の通り包括的な意味で用い、限定的な意味としては「クスコ・インカ土器」ないし「古典インカ土器」という用語を使用する。
- (2) 実際に、ペルー南海岸 (Menzel 1976)、ティティカカ湖周辺 (Julien 1978; 1981: Fig.2) では、インカ土器は高位の人物の墓と考えられる場所から見つかった。また、器形と装飾スタイルが地域の土器伝統に影響を与えたということからも「権威」は示唆されるという (Lunt 1988: 491)。
- (3) 岩田安之氏 (2005: 273-274) は、「地方インカ・スタイル」を、意図的にクスコ・インカ土器の文様を変化させたものと自然に在地の土器とインカ・スタイル土器の属性が融合したものの2つがあると捉えている。このうち後者は本稿の「ハイブリッド・スタイル」にあたる。一方、前者について岩田氏は、「中央の文様そのものは使用できないが、中央文様を少し変化した多文様であれば使用できるという状況が推測でき、インカが当該地域を自らの傘下に入ったことを証明するために、中央文様を少し変異させた文様を地方の首長に下賜したことを示していたことが推測可能である」(岩田 2005: 274-275) とまで述べている。しかし、可能性は否定できないものの、現状では解釈の行き過ぎの感が否めない。

- (4) ロウは同じレヴェルの分類に対してType、Style、Designなどの語を用いており、述語を厳密に使い分けられているとは言えない。
- (5) スパーリング (Spurling 1992: 242-384) は、ティティカカ湖北岸でタラコより東に位置するミリラヤを調査し、タラコ多彩色土器の製作地だと同定した。さらに、少数の資料によるチョビックの定義に対し、カオリンの使用を重要な指標としつつ、チュクィート多彩色土器で見られるナマズや植物の具象文などをもつものを含めた、広義のタラコ多彩色土器を捉えている (Spurling 1992: 311-325)。
- (6) チョビックは、チュクィート多彩色土器やタラコ多彩色土器よりもウルクスユ多彩色土器が後出すると考えた (Tschopik 1946: 51-52)。
- (7) 同様に、岩田氏 (1998) は、ジュリアンの指摘するA→Bという変化の後に、AとBの両方の文様要素を併せ持つ土器が出現すると考えている。
- (8) バーニョ・デル・インカは、多くのインカ期の遺跡で配されている水溜状の遺構で、水場としての実用的な意味の他に、水や豊穡をインカがもたらすという象徴的意味合いを持っていたと考えられる。同遺構についてはたとえばHyslop (1990: 129-145) を参照のこと。
- (9) これらの皿には、脂肪が付着しており、ランプllampuとよばれ、儀礼の際によく使用されるリャマの脂肪や、トウモロコシ団子がのせられていたと考えられる (Gibaja 2004: 178-179)。
- (10) ミタおよびミティマエスについては、たとえばMurra (1980: Chap.8) を参照のこと。
- (11) サーニョとはインカ帝国の言語ケチュア語で土器の意。カマーヨは工芸などに従事した人々と考えられている (Murra 1980: Chap.8; 大平 1993)。しかし、こうしたカテゴリーの実態を限定的な文書資料から正確に定義・把握するのは困難である (Hayashida 1998: 314)。
- (12) 土器そのものを納めることがインカ国家に対する義務として言及されている事例もひとつある。しかしその義務は極めて小規模で、通常生産した土器の一部を国家にまわしただけである (Hayashida 1998: 323-324, 326-327)。
- (13) ミティマエスというより、共同体から離れてインカ国家に奉仕したヤナ、ヤナクーナの一種と言える。ヤナ、ヤナクーナについては、たとえば網野 (1988) を参照のこと。
- (14) たとえば、ワヌコ・パンバのアリバロは、クスコのものより胴部が球形に近く、丸まった肩をもっているという (Morris and Thompson 1985: 76)。
- (15) ラントはbonfireという用語を用いているが、彼女らが行った焼成実験では覆い焼きを行っているので、これを意図しているのであろう。先スペイン期の確実な土器焼き窯の出土例はない (Spurling 1992: 286-289)。
- (16) 具体的には、垂直方向に二分された土器製の型に粘土を押しつけて成形する。大型のものは、口縁と頸部が型で作られているが、他の部分がどうかは採集資料からは明らかでなく、小型ものは、おそらく完全に二分された型で全体が成形されているという (Hayashida 1995: 211)。
- (17) この破片は極めて硬く焼き締まっており、胎土中の石英が熱で変形していることなどから、850~1000度の高温での焼成が想定されている。こうした還元焼成を用いたと考えられる土器 (灰色を呈する土器Inca Gray) は、レチェ谷以外でもビルー谷や南海岸 (Menzel 1976: 30) でも報告されており、インカ土器の還元焼成は海岸部で利用された技術である (Hayashida 1995: 212, 232-233)。また、レチェ谷にはインカ国家によって導入されたと考えられている (Hayashida 1998: 328)。
- (18) チリ北部のディアギータ土器とのハイブリッド・スタイルであるインカーディアギータ土器は、たとえば、アルゼンチン北西部のSan Juan de Mendozaのインカ諸遺跡においても顕著に分布する。これは、インカの影響でインカーディアギータ土器を製作するようになった地方社会の人々が、ミティマとしてアンデスの西側から東側に移住させられたことを示唆していると解釈されている (Hyslop 1993: 342)。しかし、インカーディアギータ土器はウルクスユ多彩色土器に比して日用品的色彩が濃い。
- (19) さらに、チンチェーロ遺跡で具象文多彩色土器Policromo Figurativoとのみ報告されているもの (Rivera 1976: Fig.109-113) の大部分も、その文様からチュクィート多彩色土器と考えてよい。これらの多くは把手

付きの浅鉢であり、ナマズをはじめとする具象文と斑点文が特徴である。ハトゥンコヤでの発掘においても多数の類例が出土している (Julien 1978: Fig.37, 132, 135, 136, 157, 165, 166)。調査者は、ティティカカ盆地南方の土器との関連性を指摘しており (Julien 1978: 206-207)、本文中で触れたチュクィート多彩色土器と関係するものと判断される。オリヤンタイタンボ遺跡では、インカ期の建築物を壊す形で、その上部に新たなインカの建築物が建てられたことが判明し、1535年以降の「ネオ・インカ期」に比定されている。その建築物に伴う土器として同様の土器が報告されており (Gibaja 1984: Fig.4)、ウルクスユ多彩色土器と同様、比較的新しい土器と考えられる。ハトゥンコヤ遺跡でも最終段階 (フェイズ3) で本格的に出土し、また斑点を有するナマズ文様は初期植民地時代に位置づけられている (Julien 1983: 235)。

- (20) インカの起源神話には、出自の場をクスコ南方のパカリクタンボとするものと、ティティカカ湖とするものがあり、後者はインカ帝国が拡大するに際し、ピラコチャ神話などを取り込んで誕生した新しいヴァージョンだと考えられている。
- (21) 当初、これらの土器はティワナク・スタイルと解釈され、いわゆるティワナク文化とインカの同時代性が指摘された (Valcárcel 1935: 163-164, 166, 173)。しかし、両者とも、器壁に厚さ、胎土、仕上げ、焼成の特徴がクスコ・インカ土器と同様であり、またそれがティワナク・スタイルの土器と顕著に異なっていることから、インカによってティワナク・スタイルの土器が模倣された、「古典主義」(Means 1935) のものだと考えられている (Julien 2004: 49)。
- (22) 文書資料によれば、第9代のインカ王とされ、またティティカカ湖周辺を征服したともされるパチャクティは、同領域のティワナク社会によってつくられた石造建築をみて、クスコにも同様の石造建築物をつくるように命じたという (Cobo 1956[1653]: cap.XIII, vol.92: 82)。
- (23) ウルクスユ多彩色土器について、チョピックは分類当初より、文様構成以外の点ではその特徴に一貫性があまりないと述べており (Tschopik 1946: 32)、これは多様な生産体制が背景にあったためとも考えられる。成形と彩色に分業制があったかどうかを含めて考察する必要がある。